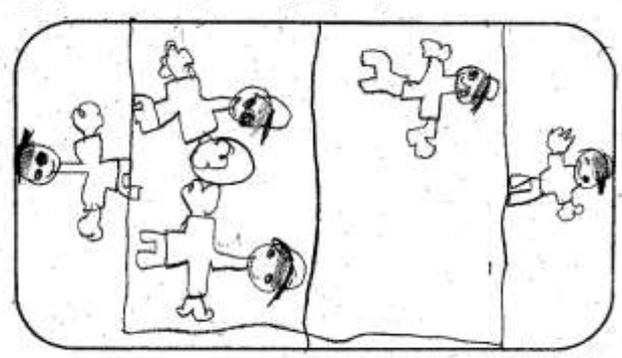
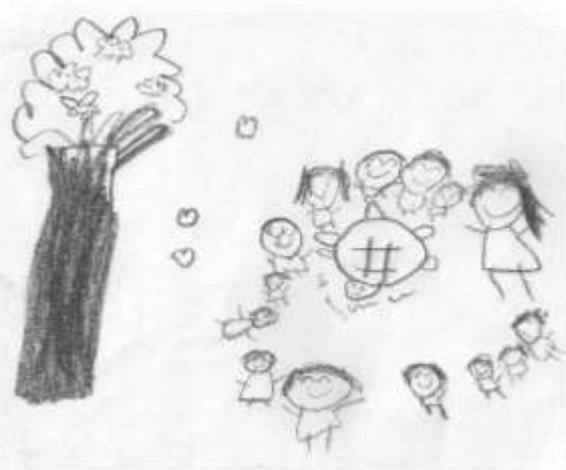
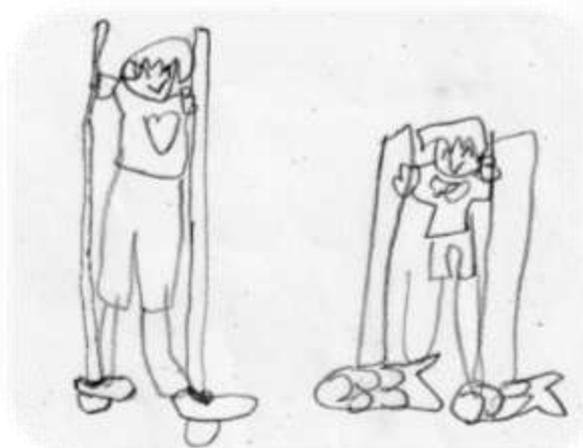




心も体も元気いっぱい！ 自分らしさ輝くこども園
～心地よいそよかぜの中 育ちあい認め合おう～

《1年次 研究報告》



心も体もげんきいっぱい！自分らしさ輝くこども園

～心地よいそよかぜの中 育ちあい認め合おう～

八尾市立西郡そよかぜこども園

所在地：八尾市桂町2-33

電話：072-999-2376

園長：上田 愛

◆クラス編成◆

〈乳児クラス〉

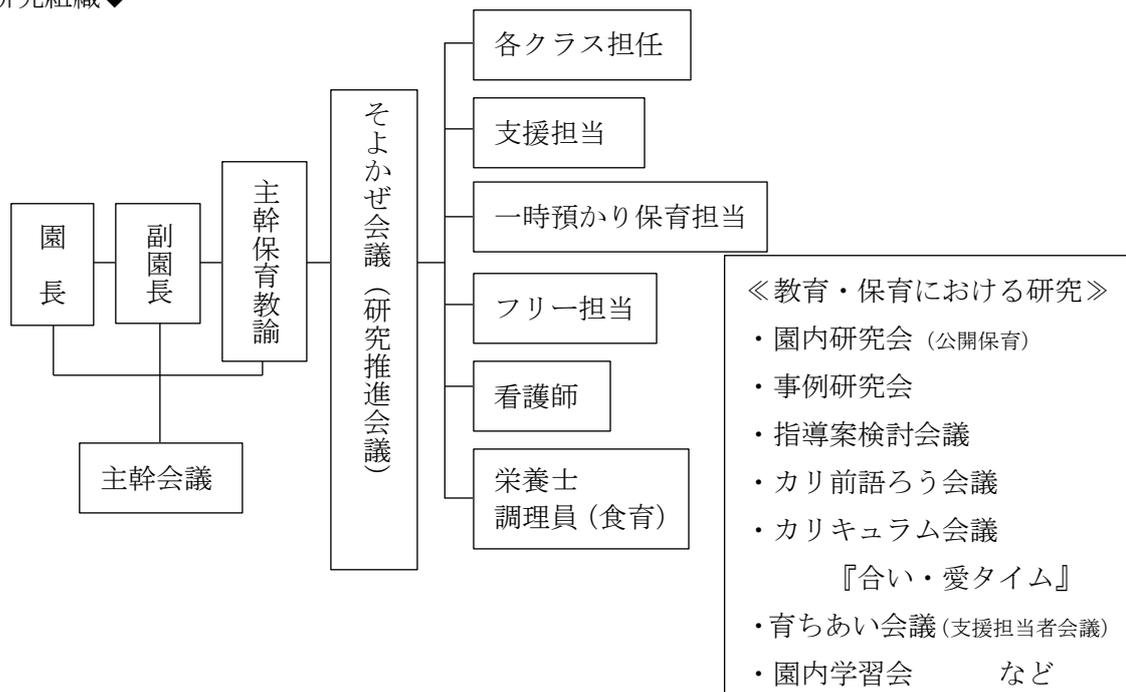
0 歳 児	1 歳 児		2 歳 児		合 計
ひよこ組	りす組	うさぎ組	ぞう組	きりん組	59名
9名	12名	12名	13名	13名	

〈幼児クラス〉

3 歳 児		4 歳 児		5 歳 児		合 計
いちご組	もも組	さくら組	ひまわり組	そら組	ほし組	114名
19名	19名	18名	18名	20名	20名	

合計： 173名

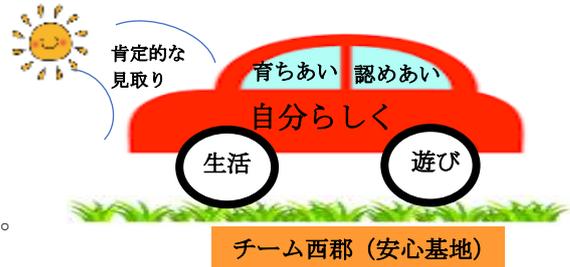
◆研究組織◆



1. 研究テーマについて

(1) 園の実態とそこから見える課題

令和4年度より子どもたちにとっての“心地よい環境”とは何かを追求し、一人ひとりの気持ちに寄り添い、ありのままの姿を受けとめてきた。また、楽しさや成功体験に共感しながら情緒の安定を図ることで、一人ひとりの安心基地となるようにかかわっている。その中で、子どもたちが様々な感情の交流を重ね、色々な思いに触れ、自分の気持ちに折り合いをつけたたり心の葛藤を経験したり、どんな自分もありのまま受けとめられる心地よさを味わえるように、肯定的な見取りを意識することで少しずつ子どもたちの心が安定していると感じている。



保育者間で“心地よい環境”をめざし、肯定的な見取りを学び合う中で、インクルーシブ教育・保育（育ちあい）の理解を深め、“チーム保育（同僚性）”を大切にすることを再認識してきた。チームで保育をするということは、多面的に子どもの姿を見取れる一方で、様々な保育観を認め合うことが大切になってくる。“目の前の子どもたちに、どう援助することが育ちあいになるのか”“その育ちあいはどのような子どもの姿であるのか”など、子どもを中心に語り合える職員集団であるべきと考える。

子どもの興味・関心を見取り、その都度環境の見直しを行いながら保育を進めてきた。しかし、子どもたちの生活が安定し、遊びが広がり深まるための環境を再構築したり、言葉をかけたりするタイミング、この遊びは発達に合っているのかなど、悩んでいる保育者は多くいる。そのように保育実践の中で気づいたり、具体的な子どもへのかかわり方を振り返ったりすることを大いに認めながら、保育者の意欲とともに保育力向上につなげていきたい。また、一人ひとりを認める言葉がけや肯定的な見取りは、人権教育そのものであることを学習会や日々の記録の中で互いに確認し合い、意見を交流し、多様な考え方を知る機会にもしていきたい。

子どもの姿に寄り添うための保育準備や保育者間で話し合う時間の捻出も課題である。会議の持ち方や進め方を見直し、ライフワークバランスを考え、保育者の心と体のバランスも大切にしていきたい。

(2) 研究テーマの考え方

インクルーシブ教育・保育（育ちあい）を大切にしながら、支援を要する子どもだけでなく、心が動く出来事を見逃さないようにしたり互いの感じ方や思いに気づいたりして“多様性を認め合い”自分らしく輝く毎日を過ごしてほしい。そのためにも、“育ちあう”姿をチームで見守り、援助することができる保育者をめざしたい。また、保育者も自分らしさを発揮し、保護者も地域も巻き込みながら、そよかぜのような穏やかな心もちで、子どもたちを包み込む保育者集団であり続けるために育ちあいたいと以下の研究テーマを設定した。

研究テーマ
心も体もげんきいっぱい！自分らしさ輝くこども園
～心地よいそよかぜの中 育ちあい認め合おう～

2. 研究方法について

保育者が自分らしく主体的に取り組み、学びにつなげられるように、以下の視点をもって研究を進める。

- ・無償の愛情をもって子どもと接し、『探求心』や『自己肯定感』を育む
- ・子どもの姿を肯定的に見取り、言葉がけを意識する
- ・ダイアリーから子どもの姿を見取り、実態を把握することで次の手立てにつなげる
- ・子どもたちの心が動くような環境構成を考え、教材研究をし、実践する
- ・多様な子どもたちが、自分らしさを発揮し、互いに認め合える関係づくりや、ともに“育ちあう”姿を見守るための、保育者の適切な援助や対応を学ぶ
- ・保護者も心地よく通えるこども園をめざし、信頼関係が築けるような保護者啓発を実践する

【そよかぜ会議（研究推進会議）】 P. 20 参照

チーム力向上のために月1回各学年の代表が集まり、それぞれの課題や意見をもち寄り話しあう。研究テーマに迫った保育を実践していることの確認や日頃の悩みを園内学習会に活かす。

【園内研究会】（公開保育）

保育を公開し、観察シートをもとに自分らしく輝いている姿・遊び方・環境構成・育ちあいの場面を見取りながら、一人ひとりの子どものタイミングを分析し検討する。参加者の意見や教授の指導助言をもとに、日々の保育実践へ活かし、質の向上へとつなげていく。

【事例研究会】

遊びのプロセスから子どもの内面に迫り、『やってみたい』という主体的な姿や「なんで？」などの困り感をどのように受けとめ、育ちあいを援助してきたか、さらに遊びの過程を探る中で、様々な視点から学びを深める。また、保育者の願いや思い、ねらいや活動の振り返りをどのように整理し、遊びや意欲につなげるか、適切な援助を導いていき明日からの保育につなげていく。

【指導案検討会議】

学年やクラス担任の思い、自分らしく輝く子どもの姿や育ちあっている子どもの姿が反映された指導案づくりをめざし、検討し合う。また、課題や保育者の援助や環境づくりなど、遊びのプロセスが明確になる指導案にする。

【カリ前語ろう会議（カリキュラム前に話し合う）】 P. 20 参照

担任と担当主幹が子どもの『今』の姿を共有し、肯定的に捉えながら、ねらいに沿った環境構成や援助になっているかを学年間で意見を出し認め合う。また、担任の悩みに主幹が寄り添い一緒に進めていく。

【カリキュラム会議（合い・愛タイム）】 P. 20 参照

カリキュラム会議後、残りの30分を保育の悩みや意見を出し合える時間として“合い・愛タイム”と称し、語り合うことを大切にしている。

【育ちあい会議（支援担当者会議）】

支援担当者だけでなく主担任や参加希望の職員とともに、多面的に一人ひとりの（発達の）スモールステップを確認し合う。さらに、日々の保育の中で一人ひとりが自分らしく輝くための援助方法を探り、子どもも保育者も育ちあえるようにする。

【園内学習会】

保育者の悩みや学びたいことから、ニーズに合った学びとなるよう計画を立てる。保育者間の対話を心がけ、一人ひとりの保育の質の向上となるような機会となり、同僚性を育むきっかけとなるようにねらいをもって行う。

3. 研究実績一覧

(1) 園内研究会

	日付	学年	討議の柱
1	5/30	4歳児	遊びの中で心が動いた瞬間を見取り、夢中になるための環境構成と援助とは
2	7/25	3歳児	一人ひとりの遊びを大事にしながら、遊びが広がるための環境構成と援助とは
3	8/8	2歳児	子どもの楽しさを見取り、見立て・つもり遊びに広げる環境構成と援助とは
4	10/17	0歳児	子どもたちが安心して興味のある遊びを楽しむための保育者のかかわりや連携について
5	11/12	1歳児	一人ひとりが安心して過ごし、主体的に遊ぶことのできる環境構成と保育者のかかわりとは
6	1/16	5歳児	友だちと一緒に好きな遊びを楽しみながら、自分らしく遊び込むための環境構成と援助とは

(2) 事例研究会

	日付	学年	討議の柱
1	9/4	1歳児・3歳児	子どもの心が動く瞬間を見取り、一人ひとりが自分らしく輝くための環境構成と援助について考える
2	12/10	1歳児・4歳児	

(3) そよかぜ会議（研究推進会議）

	日付	内 容
1	4/19	園内研究会日程確認・カリキュラム話し合い方法・園内学習会で学びたいこと
2	5/13	指導案の書き方・4月カリ会議内容検討・『カリ前語ろう会議』内容検討
3	6/13	第1回園内研究会の振り返りと共有・第2回園内研究会の内容検討
4	7/8	事例研究会の進め方検討（園内学習会での事例研究会の感想も含む）
5	8/21	1年目の研究冊子作成について考える
6	9/12	3・4歳児園内研究会での指導よりその後と、報告・共有（担任より）
7	10/16	ファシリテーター（KJ法と※SH法の比較など）や各会議についての意見交流 1年目の研究冊子作成について 12月の事例研究会の記入用紙変更について 1歳児（うさぎ組）の園内研究会での報告と指導助言の共有（担任より） ※SH法（しゃべりたい放題）とは自園独自の話し合いの仕方
8	11/15	1歳児園内研究会指導助言ビデオ視聴 12月事例研究会について
9	12/12	各外部研修報告 今後の研究の取り組みについて
10	1/20	1/16保育と講演の参加者の意見・感想の共有 学習会内容検討
11	2/7	研究2年目にむけて意見交換

(4) 園内学習会

	日付	内 容
1	4/10	【転任者向け研修】研究テーマについて（取り組みや経緯説明） 【インクルーシブ教育・保育について①】
2	4/26	【気になる子ども・保護者の共有】 【インクルーシブ教育・保育について②】 【グループワーク】『自分らしさって？』 【指導案様式共有】
3	5/28	【人権研修】『子どもを尊敬するって？』保田 維久子先生の研修より 泣いている子を抱っこするだけでいい？ —子ども理解と遊び—
4	6/27	【保護者支援について①】安心して預けてもらえるには？ （保護者とのかかわり）今どきの保護者支援を考える 【グループワーク】事例研究会をしてみよう —3つのパターンで—
5	7/30	【研修報告】みんなで学ぼう会 【グループワーク】『教材研究って？』 —好きな遊びで考えよう—
6	8/29	【1学期の研究を振り返って】8/8の2歳児園内研究会の報告 【保育ウェブをしてみよう！】『ままごとについて』—乳児・幼児に分かれて—
7	10/24	【育ちあい会議の共有】 【インクルーシブ教育・保育について③（再確認）】 【グループワーク】4月から9月までの園内学習会の振り返りと感想
8	11/26	【保護者支援について②】こんな時どうする？みんなで考えよう 【グループワーク】『保護者との関係づくり』 —保育者の心もち—
9	12/13	冊子報告 2学期総括
10	1/28	保育と講演の5歳児の報告と中間報告の共有 研究2年目に向けて、各学年に分かれてグループワーク

◇園内学習会の内容を抜粋紹介（第2回より）

【気になる子ども・保護者の共有】

- ・子どもや保護者の顔と名前が一致しやすいように、写真を活用した
- ・前担任から子どもの様子や保護者の悩みなどを具体的にきくことで、園全体で共通理解することができる
- ・4月に実施することで、職員間の共有意識が高まり、チーム西郡（同僚性）としての保護者支援体制につなげる

【グループワーク】『自分らしさって？』

まずは自己紹介！もちろん、肯定的に自分のことを発表（照れくさい💦）

その後グループのメンバーからよい所を言ってもらおう（嬉しいけど恥ずかしい💦）

『褒めてもらえる』ってこんなに嬉しくて、モチベーションが上がるんだ！
子どもをたくさん褒めよう！と感じた

4月の学習会で『自分らしさ』を伝え
あったことで、学年集団のそれぞれの
よさに気づいた

褒めてもらうのはちょっと恥ずかしかったけど、自分も知らない『自分らしさ』に気づくことができた

一人ひとりの違いが個性だということを再確認した

褒めてもらえるって大人も嬉しい！



◇園内学習会の内容を抜粋紹介（第1・2・7回より）

【インクルーシブ教育・保育について】～“育ちあい”をみんなで学ぼう～

昨年度から“育ちあい”をテーマに学んでいく中で、まずは保育者自身が“インクルーシブ保育”について正しく理解し、共通認識をもつことが大切だと考えた。まず第1回の園内学習会では、①インクルーシブ保育とは、②教育形態の図を用いて、インクルーシブ保育をイメージする（統合保育との違い）、③職員連携の大切さ、④指導計画・記録の大切さ、⑤保護者支援について確認をし、今年度の保育をスタートした。『個の育ち』と『集団の育ち』を意識した個別の指導計画を支援児だけでなく、クラスの子ども一人ひとりにも意識しながらP D C Aサイクルで実践していく。

違いを認め合い、クラス全体が温かい雰囲気となるように、保育者が子どもたちの違いを尊重することで、よいモデルとなり、自分らしく輝ける保育をめざしていきたいと考えた。

子どもも大人も
自分らしく輝こう！



統合保育とインクルーシブ保育の違い

- ・**統合保育**
定型発達の子ども集団が前提で
そこに支援児を適合させる
- ・**インクルーシブ保育**
いろいろな子どもがいることが前提
それぞれに必要な支援がされている
→クラスの中で自分の良さを発揮できている

個別の指導計画

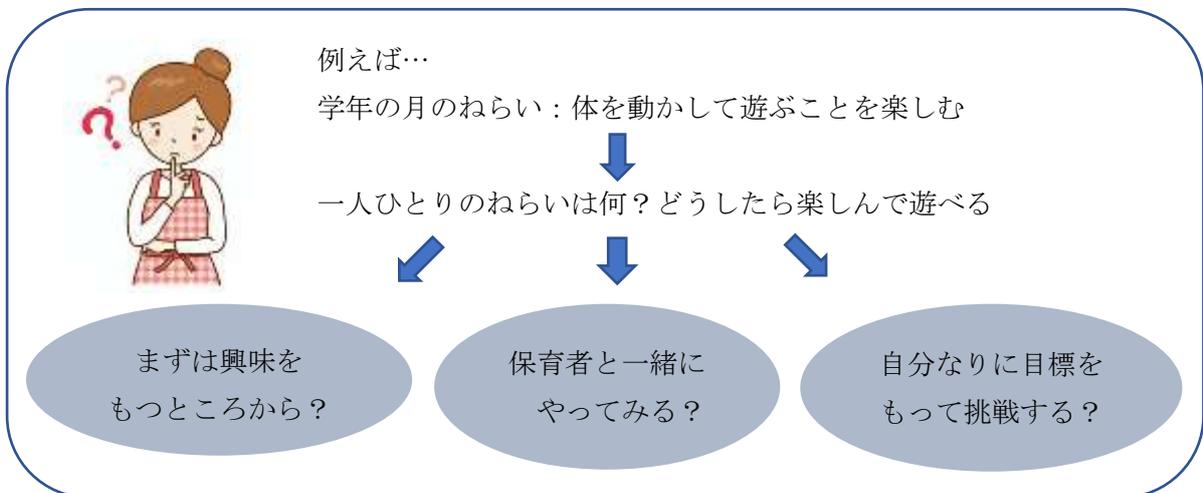
- ・個別で育てたいことの目標を考える
- ・学年の目標を見て、支援児がどうしたら楽しく参加できるかを考える

支援児だけではなく、クラスの一人ひとりに当てはまること！

※出典：令和4年度職場研修にて鶴教授より

※園内学習会パワーポイント抜粋

実際の保育のねらいとつなげて考えてみると…



大事にすべき視点

- ・クラスから個へのつながり、集団の中で個を見る視点を大事にする
- ・集団と個のバランスを大切に“ともに育つ”という視点を大事にする

「個の育ち」と「集団の育ち」を意識する

※園内学習会パワーポイント抜粋



個別支援とクラス運営は車の両輪のように進んでいくイメージ！



前半を終えたタイミングで職員間の連携について振り返り、課題を見つめ直す機会として、第7回の園内学習会で再確認した。前半の保育を振り返る中で、子どもたちの育ちとともに、職員間で互いのよさを認め合い刺激し合っている報告もあり、子どもはもちろん、保育者も育ちあっていると手ごたえを感じた。これからも評価反省をし、課題を見つめ直すことで今後の保育実践につなげていきたい。

そして、今年度はさらにインクルーシブ保育の基本となる“誰もが分かりやすい環境づくり”について、“ユニバーサルデザイン”や“基礎的環境整備”の共通認識を深め、園内・保育室の保育環境を見直し、“合理的配慮”を行っていききたい。また、支援児や配慮児だけでなく、一人ひとりがクラスの中で自分のよさを発揮できるようになるための支援を進めていくために“チーム西郡”で一丸となり、子どもたちの育ちを支え見守りながら、保育者自身も育ちあいたい。

環境構成の工夫①

安心して落ち着く環境

- ① 刺激の少ない環境
- ② 安心できる場所、安心して好きな遊び（場合によってはひとり遊び）ができる環境
- ③ 同じ時間で、同じ場所で、同じ人で、同じやり方で、毎日繰り返す活動の活用

環境構成の工夫②

分かりやすい環境

- ① 何がどこにあるのかわかる、自分が何をやる場所かわかる、保育者に注意を向けられるなど
- ② 環境の構造化
=子どもが見て、理解しやすい環境を設定するための工夫

※出典：平成30年度インクルーシブ保育の基礎と事例研修にて鶴教授より

基礎的環境整備

「ユニバーサルデザイン」や「視覚支援」を取り入れた保育は「インクルーシブ保育」の基本となる

- ・クラスの環境構成と全体の支援が「基礎的環境整備」
- ・個別の支援が「合理的配慮」

基礎的環境整備
すべての子どもがわかりやすく居心地のよい園内・保育室

※園内学習会パワーポイント抜粋

4、研究内容について

(1) 各学年の取り組み

0歳児 ～園内研究会より～

クラス	学んだこと	取り組んだこと	保育者の心もち
0歳児 ひよこ組	<ul style="list-style-type: none"> 安全、安心な場を提供するためには、保育者同士の連携が必要不可欠である 保育者間の連携を取ることで、多面的に子どもを見取れる 個々の発達や育ちが見えてくると、今何が必要なのか個々の援助も見えてくる 一人ひとりの興味、関心を子どもの目線で見極める 子どもの姿に応じた環境を整えるようにする 	<ul style="list-style-type: none"> 子どもの目線で一緒に楽しみ、興味や発見に共感した 乳児園庭の使い方を工夫し、探索活動ができるようにした 子どもの興味を捉えて、子ども目線で玩具や保育室の環境を再構成した 階段の昇り降りは、色々な方法を試しながら安全に行えるように連携した 	<ul style="list-style-type: none"> 子どもたちの姿や様子を伝え合い、保育者間で共有しながら保育を行う 環境を再構成する時は、子どもの目線に立つ 子どもの興味、関心に寄り添い共感し、一緒に楽しむことで子どもたちが自ら好きな遊びを選べるよう援助していく 思いを存分に受けとめられることで、自分が大切にされる経験を積み重ね、情緒が安定した心地よい生活を過ごせるように援助していく 一つひとつの動作を言葉にしながらか援助することで、発語につながるようにする

☆西郡の0歳児(ひよこ組)の保育室は2階にあります☆

【担任の悩み】



階段の昇り降りでは四肢の動きはスムーズにできるかな？

時差をつけたらどうかな？

保育者間で連携し、少人数ずつ降りたらどうかな？

取り組み後・・・『連携』を取り、繰り返すことで以前よりスムーズになったよ！



子どもたちが生活や遊びの中で安全、安心に過ごすには、やっぱり『連携』って大切なんだね

子どもの姿を伝え合うことで多面的に見ることができるし、個々の発達や育ちがよくわかるね。これからも『連携』を意識することで、子どもだけでなく私たちも育ちあっていこうね！

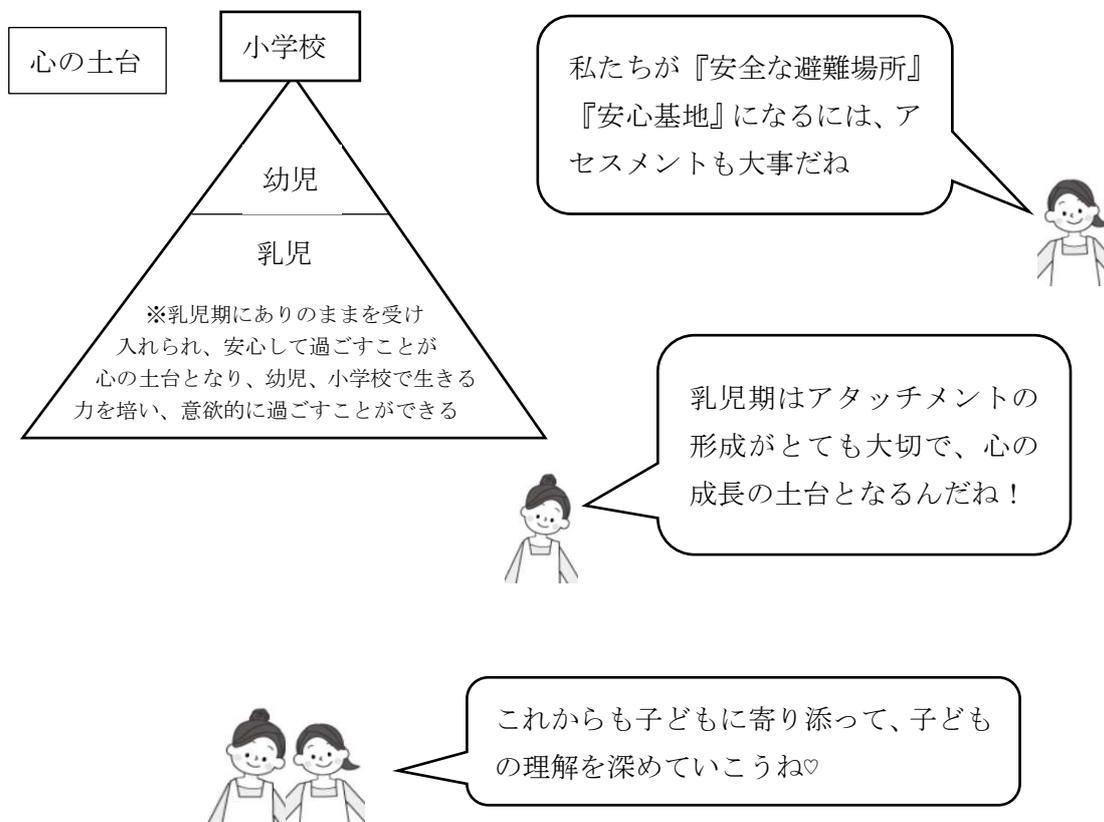


1歳児

～園内研究会より～

クラス	学んだこと	取り組んだこと	保育者の心もち
1歳児 うさぎ組	<ul style="list-style-type: none"> ・乳児保育の中でアタッチメントの形成が、心の土台づくりの基礎であることを再認識できた ・『安心感の輪』というアタッチメントを図にしたものを知ること、安心感の保持の4つの姿勢を学んだ ・子どもの行動や姿に対し「何をしているの？」と、子ども目線になって楽しんでいる本質にスポットを当てて見取ることの大切さを学んだ ・整えた環境が、子どもが使いにくそうだったり、保育者の思いと違う方法で遊んだりしていたら、環境の再構築が必要だという事も学んだ 	<ul style="list-style-type: none"> ・引き続き温かく優しい雰囲気大切に、子どもが安心して過ごせるようにかかわった ・子ども目線で“楽しんでいるポイント”を深く考えながら見取ろうと努めた ・担任間で子どもの“楽しい”を語り合い、子ども理解につなげた ・子どもの姿についての語り合いを通し、意識向上、連携の大切さも共有した 	<ul style="list-style-type: none"> ・一人ひとりの子どもたちに『安心感の輪』が安定して回っているのかや、言葉にならない視線や仕草などを注意深く意識するようにしている ・子どもの目線に立ち、何を楽しんでいるかを見取り、保育者も一緒に楽しむようにしている ・担任間で子どもの姿を共有する機会を今まで以上に多くもっている

【グループワークより】



2歳児

～園内研究会より～

クラス	学んだこと	取り組んだこと	保育者の心もち
2歳児 ぞう組 きりん組	<ul style="list-style-type: none"> ・遊びの場所を固定することで、自分のしたい遊びが楽しめるようになる ・発達に応じた遊びを大切に ・見立て遊びを楽しむ時期に応じた、見立てやすい色や素材、数を考え、準備する ・子どもたちが、何を楽しんでいるのか保育者が見取りかかわっていくことを大切にする 	<ul style="list-style-type: none"> ・保育室の環境を考え、ままごと、絵本、構成遊び、机上遊びなど子どもに分かりやすいよう、遊びのコーナー分けをした ・子どもの遊びが継続できるように、置いておける場所をつくった ・ままごとのアイテムを見直し、見立て遊びがしやすいものを準備するなど、工夫した 	<ul style="list-style-type: none"> ・今まで子どものつぶやきを拾って環境の準備をしていたが、さらに子どもたちの『楽しんでいる姿』を観察し、何を求めているのかを見取りながら、かかわることを意識している ・子どもが楽しんでいることを保育者も一緒に楽しみ、共感するようにしている ・日々の経験やごっこ遊びがより具体化されるように、擬音語を添えるようにしている

【鶴教授からの助言を受けて…】

2歳児の発達にあった遊びも大切だね。
遊びの場所を固定することで、自主的に
遊べるようになるよ <鶴教授より>



今の環境では難しそう！
担任間で環境を考えてみよう！

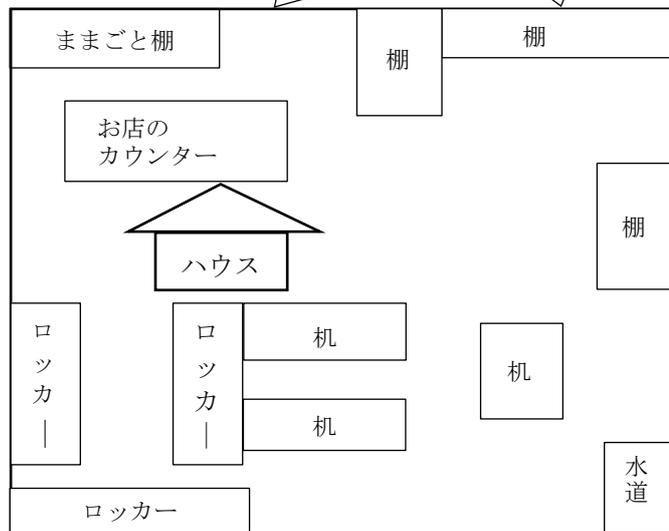
《Before》

BBQ・お医者さん
ごっこなど

生き物
・パズル

今のままだと・・・

- ・様々な玩具が混在し遊びにくそうだね
- ・その時によって遊ぶ場所が変わっているよね
- ・このままだと机上遊びがなかなかできないなあ



◎鶴教授からの助言を受け、早速保育室を担任間で見直した

◎ロッカーを動かし、思い切って環境を見直し、遊びのスペースの保証だけでなく、生活の流れ、安全面など、様々なことを想定し、今の子どものためのベストな環境を整えた

変えてよかった♡
ロッカーを机の周りにしたことで、食後の流れもスムーズになったよ



環境の再構築

《After》

ロッカーを壁ぎわに設置



遊びのスペースが広がったことで遊び同士が混在することも減ったよ！
(遊びによっては手づくりパーティーなど仕切る時もある)



いつもと同じ場所で、お絵描きや、パズルなど机上遊びができるスペースをつくった

園内研究会後、変容した子どもの姿

- ・遊びの環境を整え遊びのスペースを固定したことで、子どもたちが自ら好きな遊びを見つけ、じっくり楽しんでいる
- ・ブロック遊びでは、自分でイメージしながらついたり、つくったもので友だちとやりとりして遊んだりしている。また、同じ遊びに興味をもった子ども同士が、一緒につくって遊ぼうとする姿も見られ、少しずつ友だちとのつながりがでてきたように思う
- ・パズル遊びでは、初めはできなくて保育者に助けを求めたり、すぐに諦めてやめてしまったりする姿が見られた。机上遊びのスペースをつくったことで、徐々に集中してじっくりと遊ぶようになった。また、子ども同士で「一緒にやろう」「手伝おうか？」と、簡単な会話が生まれ、つながりが見られるようになった

3歳児

～園内研究会より～

クラス	学んだこと	取り組んだこと	保育者の心もち
3歳児 いちご組 もも組	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの気持ちや求めていたことなど、トラブルの背景にある経緯を考え、援助につなげる ・簡単すぎない、少し頑張ればできるような遊びが、子どもたちの『やってみよう』につながる ・自分の感情や他の子どもの感情、保育者自身の感情も言葉にして伝えることが重要である (※『インリアルアプローチの言語心理学技法』を活用) 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちの様子をよく観察し、声をかけるタイミングを見極める ・支援児との関係性では、事前に約束事を確認し、守れるようにすることを心がけた ・遊びと遊びが自然につながるように、動線を工夫した ・子どもたちが自由に発想を膨らますことができるように、『インリアルアプローチの言語心理学技法』を意識している 	<ul style="list-style-type: none"> ・保育者の立ち位置を常に意識しながら保育を行う ・トラブルが起こるきっかけや背景を理解し、トラブルが起きる前後で、子どもの心情がどのように変化したのかを考え、理解するように努める ・心情に寄り添うことで、安心して自分の気持ちを表現できるように支援する ・保育者も子どもたちから学び、ともに成長していることを実感し、子どもたちに支えられながら保育に取り組んでいる
<p>※『インリアルアプローチの言語心理学技法』 言葉やコミュニケーションに障がいをもつ子どものために開発された援助方法。相互に反応し合うことで、コミュニケーションを促進する</p>			

園内研究会後、変容した子どもの姿

- ・遊びの環境を整え、自由に発想を膨らませることができるようにしたことで、子どもたちは自分の考えやアイデアを3歳児なりに表現し、新しい遊びを生み出すようになった
- ・保育者が、二語文から多語文に広げて返すように意識してかかわってきたことで、子どもたちも多くの言葉で応答するようになり、言葉の数が増えてきている。話すきっかけが増え、子どもたちの表現が高まっている
- ・トラブルが起きた際には、起こるまでの状況を子どもたちと一緒に丁寧に振り返ることで、より子どもの内面を知ることができた。そのことで、子どもたちも互いに気持ちを整理して、自分の思いを伝える姿も見られるようになった

先生たちの保育ってぜんぜん違ってそれぞれにいい所があるね。互いの保育を見たことはあるかな？それぞれの保育を見てはどうか？
そうすることで、学年で大切にしたいことも見えてくるよ <鶴教授より>



見てみたい♡学びたい！早速「やってみよう！！」

◎3歳児の担任が保育を見合っこしてきて・・・

【A先生より】

子どもたちが考えていることを環境に取り入れられないか模索している中、B先生の保育を見に行く機会をいただいた。B先生は、目の前の子どもだけでなく、広い視野で色々なところで遊んでいる子どもの様子（どんな遊びをしているのか）を見逃さないなと感じた。絶対に子どもに背を向けない、全体が見える場所に必ずいることを意識されていたので、次の日から同じようにしようと心がけている。

振り返りの中でもB先生は、声の強弱を使ったりオーバーアクションをしたりしていた。そうすることで、子どもたちの『きこう』という気持ち、『きこう』という姿勢につながり、これは絶対に知らせたい！という気持ちが子どもに伝わると感じた。子どもの主体的な気持ちと姿勢が引き出せるように、振り返りの中で心がけている。

【B先生より】

日々の保育の中で、今は見守る方がいいのか声をかける方がいいのかと思うが、すぐに声をかけてしまう自分がある。今回A先生の保育を見て、A先生は、子どもの思いに寄り添い、心を読み取ろうとしていて、かかわり方が穏やかで、優しいと感じた。視覚支援を丁寧に細かく用意されていて、子どもたちがわかりやすく、過ごしやすい環境を常に考えていると思った。

子どもの声を拾って遊びの形にしてあげたいというA先生の思いを強く感じる。時間がある時には、こちらのクラスの様子を見に来て、自分の保育に活かそうとする向上心や意欲も高いことは、自分自身の励みと意欲になっている。これからも一緒に保育をしていく中で、高め合いながら成長していきたい。

【担任・担当主幹・園長との振り返りより】

○遊びの中でのトラブルは、かかわり方を知るチャンス。友だちの気持ちを知ったり、つながれたりするので、保育者はその機会を逃さずに活かしていく。また、子どもたちの関係性を見ていくことも大事になってくる。

○子どもたちの『やりたいことをどう援助するのか』は、3歳児なりの簡単なルールの中で約束を決めて楽しく遊べるようにする。危険なこと以外は見守り、必要に応じてクラスでも話し合いをしていく。



A先生は、1か所でじっくり遊ぶタイプだね。一人ひとりの子どもの好きなことを知ろうとし、丁寧に思いをききながら、遊びをつくっていると感じたよ

B先生は、色々なところを広く見ているよね。子どもに背中を向けることがなく、全体が見える場所に必ずいて、子ども一人ひとりがどんな遊びをしているのか見逃さないように意識されているよね



これからも、子どもたちの遊びを見逃さないように、保育者の『立ち（座る）位置』『目線』『つぶやきをきく力』を大切に、保育をしていこうね！

4 歳児

～園内研究会より～

クラス	学んだこと	取り組んだこと	保育者の心もち
4 歳児 さくら組 ひまわり組	<p><ごっこ遊び></p> <ul style="list-style-type: none"> ・今（5月）は、2、3人の友だちとかかわれる遊びスペースが必要である ・友だちとイメージの共有ができるのは、秋、冬頃であることを踏まえ、一人ひとりのイメージを実現できるようにする ・“友だちと一緒に遊べて楽しかった”“みんなで遊べた”という満足感がもてるようにする 	<ul style="list-style-type: none"> ・室内の中央付近にテーブルや棚を置くと、遊び同士がつながることも出てきた ・共通の経験をチャンスと捉え、子どもたちが具体物をつくれるよう製作ワゴンを整えたり、製作物の置き場所を一緒に考えたりしながら過ごしている 	<ul style="list-style-type: none"> ・「自分がそばにいない時は、子ども同士が育ちあっている瞬間」「子ども同士がつながっていけるように、ごっこ遊びのスペースを段々と保育室の中央にしていく」という言葉が、その後の環境構成や保育者の援助を考えるためのヒントとなった
	<p><振り返り></p> <ul style="list-style-type: none"> ・『振り返りのポイントをどうするか』『子どもはどこまで共有できているのか』を意識して、ねらいを定めていく ・ねらいによって、振り返りの方法が変わってくる 	<ul style="list-style-type: none"> ・ねらいを意識するようになり、その時々で方法（スタイル）を変えている (例)・みんなで共有したい話は、保育者が前に座る ・子どもが発表やみんなに見せたい時は、前に出て話を進める ・相談や問題解決など、やりとりをメインにしたい時は、サークルになる 	<ul style="list-style-type: none"> ・個別での振り返りも必要なことに気づいた ・場面によって方法を変えると、保育者が伝えたいことが子どもたちに伝わり、家庭にまで届くようになってきた

園内研究会後、変容した子どもの姿

- ・ごっこ遊びの環境を見直すことで、友だちを誘い合い3～4人の小集団でイメージを共有して遊ぶようになった。また、イメージが一致すると、子ども同士の会話も増え、団結するようになってきた。さらに、集団を広げて遊ぼうとする姿も見られるようになってきている
- ・振り返りの時間で、保育者が前に出ない時は、子ども主体で話ができることを理解し、順番を決めたり椅子を自分たちで並べたりして参加するようになってきている
- ・振り返りでイメージを共有することで、友だちのつくったものに興味をもち、一緒に遊ぶきっかけとなった
- ・『友だちと一緒に』が増えたことにより、やりとりを楽しんだり、遊びの中で役割を決めたりする姿が見られた。また、自分の主張だけでなく、友だちの思いも受け入れながら遊ぼうとするようになってきた

子どものやりたいことだけを取り入れるのではなく、発達を捉えてこれは何につながっていくのかという視点も含め、環境を構成していくことが大切だね

< 2歳児園内研究会鶴教授より >



4歳児のクラスでも同じことが言えるのではないかな！？
私たちももう一度、保育室の環境を一緒に見直してみよう！

『素材が混ざり合っていないか』や『子どもが手に取りやすいか』を確認し、『この遊びを
発展させるためには、どんなものを用意したらいいか』や『遊びの中で身につけてほしいこ
とは何か』を担任間で考え、意見交流をした

また、担任間で保育についての『語ろう会』もしている。保育者同士もともに育ちあっ
ていこうという思いから、互いのクラス環境や保育者のかかわり方などをすぐに見れるように、
保育室にあるパーティションを2学期途中から一部開けることにした。子どもたちも行き来
がしやすくなり、子どもも保育者も互いに刺激を受けながら過ごしている

◎『語ろう会』 ～ある夏の日のこと…～

戸外では、石鹼を削って泡をつくる遊びが流行っていたが、暑さ指数が上がり戸外で過
せる時間が短くなってきた、ある夏の日のこと…

A先生「せっかく泡遊びが盛り上がってきたけど、しばらくできなくなるかな…」

B先生「室内でもできるんじゃない？石鹼を削る道具を置いてみようか」

室内の環境に削り器やボール、ペットボトルを用意する

↓

石鹼を削り、ペットボトルに粉をためていく

増えていく泡を見た子どもたちが、

「外に出られるようになったら、この泡を全部使って泡人間になりたい」

「いっぱいシャボン玉をつくりたい」「やってみたい！」という声が両クラスであがる

↓

『語ろう会』では、それぞれのクラスの子どもの姿を伝え合い、共通の楽しみをつかって
夏の日を過ごしてみようということになった。

たくさんのシャボン玉をつくったり、全身泡だらけになって遊んだりした。子どもたちの
『やってみたい！』思いが実現し、大満足の子どもの姿を見ることができた。

その後は、あえて『語ろう会』の時間をもたなくても、担任同士で感じたことを出し合え
る関係ができ、互いを尊重しながら、一緒に保育を考えるようになった

5歳児 ～それ、ええやん♥育ちあいエピソードより～

◎『Aの声がききたい』

自分の気持ちを言葉で発しようとしないうA。家では、たくさんお話をしているとのことだった



Aの声がききたいな…
声がきけなくても、Aが自分の思いや気持ちを安心して表現する方法はないかな…

【4歳児の頃に…】

手話通訳のできる職員がいたことから、言葉じゃなくても違う方法でAの思いを知ろうと考えた。名前は指文字で表すようにし、挨拶や返事、トイレなどはクラス全体で共有し、周りの子どもも言葉とともに体を使った表現ができるようにした。Aが手を使って伝えるようになると、周りの子どもたちもAから発信した思いとして捉えるようになり、Aに話しかける姿（コミュニケーションを取ろうとすること）が増えてきた

【5歳児になっても支援を続けていく中で】

子どもたちからの働きかけがAの刺激になったのか、好きな遊びの時間やクラスの日常の中で「先生！Aが〇〇って言った！」と、周りの子どもたちの嬉しそうな声がどんどん増えていった。しかし、内緒の声のボリューム、少人数や狭い空間では声がきかれたが、周りから注目をあびたり、自分の声をきかれていると察したりすると口を閉ざしてしまう姿があった

【ありの行列 ～耳元で話をする姿が見られるようになったきっかけ～】

保育者が近づくと、すぐに気づき話すことをやめてしまうA。子どもたちの「〇〇って言ってたよ」を保育者もききたい!!そう思っていた。ある日、廊下の隅でありの行列を見つけた。(小声で)保育者の「A、ちょっと見てみて～。こんなところにアリがいるよ」に対してAは、指をさして興味を示した。保育者が耳元で「アリ」と伝え、Aの口元に保育者の耳を近づけ、「言ってみて」と耳を指さすと、「アリ」と返ってきた。保育者の言葉を真似ただけかもしれないが、初めて保育者の応えてほしい気持ちが叶った嬉しい瞬間だった



【その後…】

クラスの中でも、『耳元ささやき合戦』が始まる。Aの耳元に話しかけ、Aの口元に耳を近づける子どもたち。「ほんまや!」「すごい!しゃべってる!」と自分のことのように喜び、Aの表情にも笑顔があふれていた。友だちとの『耳元ささやき合戦』から自信をつけたA。注目されているとわかると恥ずかしそうにしているが、「いれて!」と友だちの遊びに入ったり、「せんせー!」と友だちの姿を真似て保育者を呼んだりして、内緒の声からAの自然な声がきかれるようになってきている

◎仲間意識を育てたい・・・

自分の思いを伝える、話す力をもっている反面、友だちの話に耳を傾げにくく、自分の思いを押し通そうとする姿が見られる



- ・共通の目的に向かって話し合う時間をつくり、仲間意識が高まるようにしたい
- ・一人ひとりの頑張りや互いのよさを認め合える集団になってほしい

運動会のリレーでは、走る順番を毎回子どもたちで考えるようにしましょう！子どもたちで話し合える時間を大切にして、その中で、互いの気持ちや思いを伝え合うことができるようにしましょう！



リレーを始めた当初は、勝ちたい気持ちが先行してしまい、負けてしまった時に、クラスでどうしてこうではなく、個人に原因があると考えてしまう姿があった。しかし、ある日のリレー中に、走る順番が勝敗につながることを発見した。走るスピードが速い友だちがどの順番にいることがいかに作戦会議し、意見を出し合いながら取り組んできた

その中で、勝ちたい思いが先行し、自分がアンカーをしたいという子どもが多数出てきた。同時に、走るのスピードだけではいけない、みんなの思いを背負える人とは…と話し合い、この友だちに任せたいという思いが出てきた



【勝った負けたを繰り返し、気持ちを共有し話し合いを重ねた中での当日に向けた話し合いから…】

どこか自信がなく、目立つことが苦手なB。友だちにも保育者にも「走るのスピード」と言われても「今日のアンカーはやめておかわ」と話していた。遊びの中でも、リレーを楽しみ、「勝ちたい」気持ちが日に日に強くなっていく子どもたち。Bも同じ思いをもっている様子が伺えた。そして、当日に向けた順番を決める話し合いでは、Bが手をあげ、進んで立候補した。これまでのBの姿を見ていた子どもたちからも後押しがあり、運動会当日はアンカーを走った

人一倍リレーに熱い想いを抱き、アンカーを意識していたC。アンカーを決める時になり、Dが「Eはいつも抜かしてくれるな」F「Eがアンカーになったらいいんじゃない？」と意見があがり、周りも賛成する姿が見られた。黙って話し合いをきいているCに保育者が「Cはいいの？」と投げかけた。C「アンカーじゃなくていいねん。アンカーの前で差をつめるから。クラスを勝たせたいから、アンカーじゃなくていいねん！」と返ってきた

【子どもたちの育ち】

この経験を通して、力を合わせたり、協力したりすることで、目的が達成された時の喜びを共感することができた。子どもたちは自分の思いだけでなく、クラスの一員として自分の役割を見つけることに意欲的になった。また、一人ひとりがクラスのために、自分には何ができるかを考えることができるようになってきている。話し合いの中でも、一人ひとりの気持ちを尊重し、認め合うことができるようになってきている

(2) 育ちあい♡認め合い

① 園内学習会の内容を抜粋紹介 (第6回より)

【保育ウェブをしてみよう!】『ままごとについて』一乳児・幼児に分かれて一

“ままごと”をテーマに乳児チーム・幼児チームに分かれて話し合った。

初めは、なかなか意見が出にくかった乳児チーム。0歳児からの“ままごと”を考えるって?“ままごと”は子どもにとってどんな遊び?そこから見える、それぞれの学年の発達段階を考えた。

0歳児…大人とのかかわり・まねっこ(飲むまね・食べるまね)・再現遊び

1歳児…一人遊びから「ちょうだい」「どうぞ」「かんぱい」「ありがとう」・つもり遊び

2歳児…赤ちゃん(人形)のお世話・お母さん役・友だちとやりとり(言葉、動作の真似も含め)
再現がリアルになる(ごっこへ)・見立て・つもり遊び

3歳児…なりきり・みんな同じ役・先生と一緒に・お家ごっこ(お料理づくり)・自分!
突然のストーリー開始・今を生きる(今のみ!)

4歳児…役割がある・なりたい役がある・力関係が表れる(指示されることも・仲立ち必要)
お家ごっこからお店屋や学校ごっこへ・必要なものをつくり始める

5歳児…お店屋さんごっこも実経験により、さらにリアルになる・つくるものもよりリアルになる
役割も話し合いや譲り合いで決める・後から参加する子どもは、友だちの気持ちをくみ取りながら役になる・「明日」があり、したいことを実現させようとしたり必要なものを探してもってきたりして遊びが継続する

- ・経験がどんどん積み重なり、遊びも広がっていく
- ・心が育っていく



ウェブにしてみると年齢が違っても、お世話をしたい気持ちをもち続けて、“ままごと”が楽しい遊びであると分かった。また、年齢が上がると、自分中心の世界から周りに目を向けて友だちと話し合って役割分担をしたり、人とかかわって遊ぶ楽しさを味わったりしていることも分かった

「今の姿が役割分担につながっていくのか…」と、次年度の姿を予想でき、“ままごと”遊びを通した遊びの変遷を知ることができた。先の育ちを知ることで、今できる環境構成や仲立ちなどを見直し、考えていきたい



ウェブ写真(乳児)



ウェブ写真(幼児)

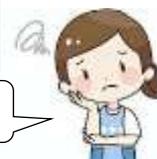
② 園内研究会・事例研究会をすすめるファシリテーション

KJ法の話し合い		SH法（喋りたい放題法）	
メリット	デメリット	メリット	デメリット
<ul style="list-style-type: none"> ・話すことが苦手であっても、付箋だと意見を出しやすい ・付箋だとすぐに可視化され、貼り変えることもできるので、まとめやすくグルーピングしやすい 	<ul style="list-style-type: none"> ・付箋が長文だと後で見た時に、分かりにくくまとめにくい ・付箋を書くことに時間が多く必要になる ・沈黙の時間が多く、緊張感が強くなる ・まとめる時間が必要なので、時間配分が難しい 	<ul style="list-style-type: none"> ・文章に書かないので、色々な意見が出る ・付箋に書く時間がない ・話しやすい雰囲気になり、参加者の笑顔が増える ・参加者の表情や顔を見ながら話し合えるのでつながり合える 	<ul style="list-style-type: none"> ・出た意見を聞き取る書記が重要になる ・話が盛り上がり、討議の柱からずれてしまうこともある ・まとめる時間が必要なので、時間配分が難しい

・今までKJ法で進めてきたが、もっと色々な人の意見・声がききたい、何かいい方法はないか話し合い、職員みんなが温かい雰囲気で行える自園の特性を活かしSH法（喋りたい放題）で『やってみよう！』となった。やりはじめた頃はなかなか上手くいかず、戸惑うことが多かった。そんな中、この方法は！？と「おなじ」カードを活用することに！参加者同士『同じ気持ちなんだ』と共感し合えるツールではあったが、ファシリテーターが担うことが多すぎて大変💦活用を断念した。今後も『トライ&エラー』を繰り返しながら、よりよい話し合い方法を模索していく



たくさんお話してくれて嬉しいな盛り上がってきたぞ～



やっぱり時間配分が難しいな～

園内研究会でファシリテーターが意識することとして…

- ・事前に指導案を読み込み、ファシリテーター自身が討議の柱に沿った着地点を明確にしておくことが大切になる
- ・参加者の意見を引き出せるように問いかける（その問いかけにより、話をする方向性が変わってくる）
- ・参加者の意見は否定せずに、復唱したり共感したりして受け入れる
- ・『なぜ』に目を向ける（ねらいや課題、理由を見失わない、言い換える）
- ・時間内に『まとめ』なければいけないプレッシャーをかけずに、“何か問いを残してもよい”と思ひ、一緒に語り合うことを大切にする

園内研究会や事例研究会、園内学習会などのグループワーク時に大切にしてきたこと

- ①笑顔 互いに話やすくなる
- ②挨拶 互いにチームの一員という感覚をもちやすくなる
- ③アイコンタクト
いつも互いに見守っているという安心感を伝えることができる
- ④うなづく
色々な意見を受け入れやすくなり、相手も話しやすくなる
- ⑤身を乗り出す 相手の言葉をきこうとする気持ちになれる
- ⑥問い詰めるのではなく問いかける
- ⑦学ぶ姿勢で
自分のやり方を謙虚な気持ちで変えてみることにつながる
- ⑧穏やかな声、言葉、態度
相手が意見を受け入れやすくなり、自分も冷静に考えることができる



参加するにあたって、こんなことも気になりますよね…



◎園内研修で保育者が感じるプレッシャー

- ・同調プレッシャー…他者の意見に同調したほうが身のため
「どんな意見も大切ですよ」
- ・評価プレッシャー…私の意見が評価されそう
- ・経験年数プレッシャー…ベテランらしい意見が求められそう
- ・完成度プレッシャー…立派な意見を言わなきゃ

※どんな意見も言い合える雰囲気的大事なのにな…
※会話がスムーズに流れる中立的な立場って？

A主幹

SH法にすると、保育を見て感じたことを思ったままに喋ってもらえ、自然な形で討議できていいなと思う。意見を話せる人、話しにくい人に合わせてファシリテーターが、問いかける点がよい方法だと感じる

C主幹

SH法だと、グループで目を見て会話しながら討議ができて、共感しながら進めていける。KJ法だと、一人で黙々と付箋を書いて出していくので、時間もかかり模造紙がいっぱいになってしまう

↓
主幹保育教諭の意見



B主幹

SH法は、みんなの意見をきいてまとめる力（どこを大事に捉えるか…）が大事だと感じた。すぐに話ができるので、時間を有効に使える！KJ法は、自分の中で“ここだ！”と思うところを一度頭で考えて記入するので、要点を説明できる。同じだ！という意見（付箋）があることで安心にもなる

D主幹

KJ法は、自分の考えを整理し付箋に書くことで、話しやすくなり、広く色々な話ができる。また、SH法は、誰かが話し始めると、そのことについて深く話し合える。どちらの方法もファシリテーターは、参加者の意見をどうまとめ、学びにつながるよう進めていくかが大切で、毎回難しいと感じる

③ 今年度取り組んだ各会議の工夫

○そよかぜ会議（毎月1回 14：10～15：00）

クラス、または学年から代表1人が参加する。園長、副園長、可能な限り主幹も全員参加する。4月の1回目のみ夕方に実施したが、時間を昼間に変更したことが好評だった。事前に話し合いたい内容を『すくすくねっと』（共有タブレット）で伝え、各学年やクラス内で話し合ってから参加するように工夫した。また、園内研究会を終えたクラス担任に感想や指導助言での学び、その後の取り組みを報告する時間も確保し、共有し合うことで、会議が有意義になっている。

また、保育実践の悩みを出し合い色々な意見をきき、保育の幅を広げたり、同じ心もちで教育・保育をしたりしていることを確認し合う時間になることも大切にしている。

○カリ前語ろう会議（2か月に1回 13：30～or14：10～担任・担当主幹が揃う時間で実施）

カリキュラムを作成するにあたり、年間計画をもとに学年間で子どもの姿を共有し、スモールステップを心がけ、子どもの主体性を大切にしながら、“週案”“日案”へつなげる。担当主幹も話し合いに加わり、互いのクラスの悩みや具体的な保育内容を出し合い、学年として何を大切にするかを確認し合えるようにしている。年度当初は、毎月1回担任と担当主幹とで実施する予定だったが、子どもが落ち着かない日々が続く、保育準備が間に合わなかったり、人員不足があったりして時間を確保することが難しくなった。当初の予定より回数は少なくなったが、無理のないよう、担任と担当主幹が全員揃うことで、保育の悩みを話し、色々な意見をきくという大切な時間となっているとの感想もあった。また、隣のクラスの子どもの様子がきける機会となったり、子どもの姿に共感してもらったりと学年で思いを共有することができた。行事や個人懇談のある7、11月を除いた、子どもから離れた場所で語れることが理想との意見もあったため、次年度も無理のないように計画していく。

○カリキュラム会議（13：30～14：30）から『合い・愛タイム』（14：30～15：00）へ

カリキュラム会議の前半は、各学年のもち時間を10分とし、報告だけにならないよう、伝えたい内容をあらかじめまとめて伝える。要点をまとめて話すことで、保育を語れるようになってきていると感じる。後半の30分は、保育の悩みや意見を出し合える時間として活用することにした。他の学年や子どものことを知ることができ、よい機会となっていると感じる。後半の30分の時間を大切にするために『合い・愛タイム』と命名し、参加者の意識を高めることにした。

『合い・愛タイム』 で出た意見

ゆうゆうタイムで保育室の環境ががらりと変わっていることや、子どもの遊びの素材が準備されている環境に心が動いた職員から…

「押入れのドアを外し、子どもたちの秘密基地みたいになっていて素敵。子どもの遊びの環境構成を忙しい中、いつどうやって準備しているのか教えてほしい！」

新入園児は日本語がわかりにくく、どうかかわったらいいか悩んでいる…

うちのクラスに日本語も母国語も上手な子どもがいるよ。通訳してもらえそう

子どもを見取る中には子どもの思いを知ること、見ること、物的環境や人的環境の重要性を改めて実感しました。また、支援が必要な子どもへの対応において、その子ばかりに目を向けてしまった部分もあると反省し、周囲の子どもたちにも目を向けることの大切さを感じた。

研究園1年目。やってみたいことにチャレンジして振り返り、また、考えてやってみて振り返る。ずっと模索していた1年でした。2年目もみんなの学びとなる研究を西郡らしくみんなで進められたら・・・

ファシリテーターをさせていただくことが多く、毎回うまくできなかったと反省します。数をこなせばこなすほど難しく感じてしまいます。

見立て遊びの大切さ、難しさを学べました。きっかけとして保育室の環境を大幅に改善できたのは、とても良かったです。

研究だから…ではなく、普段の保育で大事にすべきことを学んでいる…という感覚です。でも、会議が増えたり文章にまとめたり作業は大変なので、できる限り工夫しながら負担なくできたらいいなと思っています。西郡らしい、楽しくあったかい研究になれば！

担任の先生たちと一緒にたくさんのことを学んだ1年でした。インクルーシブ保育、乳児保育（担当制）について考えた1年でした。研究と肩をはらず、いつもの保育を大切にしながら2年目もチーム西郡で頑張りたいと思います。

研究園1年目を経験してのみんなの感想



文章をまとめたり、人前で話したりすることが苦手なので、事例研究会・園内研究会の前は、想像以上に緊張します。園内研究会後、意識して保育するようになりました。

会議が増えたり、会議の持ち方、時間の見直しがあったりし、ダイアリー作成や保育準備の時間の捻出に課題はありますが、その分意義あるものであったと思います。

園内研究会を通して様々な意見をいただけたことが、ありがたかったです。担任間で、また、自分自身で保育を見直し、次の保育につながりました。

研究園1年目。みんなで意見を出し合い、学び合いながら自分の中でも意識が高まった。これからも一人ひとりが輝けるよう、子どもも大人も楽しみながら、よりよい保育につなげていきたい。

討議の中でたくさんの先生方の保育や考え方をきくことができて勉強になった。

研究をするにあたり、学年や学級で話し合う機会が増え、自分自身の保育を見直したり、他の先生方の話をきいて、新たな見方ができたりして、とても勉強になりました。

学習会や会議などで、学年ごとの事例をもとに、色々な先生方と話し合いが多くもてたことで、子どもとの向き合い方を見つめ直し、保育に活かしていきたいと思う内容ばかりで勉強になりました。

悩んでいた連携を見てもらえてよかった。色々な学年の講義をきくことで、園全体で学ぶことができていたと感じた。園内研究会に参加した方がよく分かるので、できるだけ参加したい！

周りの先生たちと語り合うことって、自分たちの育ちあいにつながるんだな～。

実際に保育を見てもらい、鶴教授に直接質問させてもらえ、学ぶことができた。

これまでしてこなかった取り組みをするきっかけになり、よかったです。

“研究やから” “〇〇しないと” というのはあまりなかった。鶴教授の話をきける機会が多くて勉強になりました。

公開保育を見ることはできなくても、鶴教授のお話をきくことができ、学びになりました。自分の保育のヒントをもらっています。

5、成果と課題（次年度に向けて）

<成果>

- たくさん話し合う機会をもつことで、同じ方向を意識することができ、研究テーマに沿った保育実践につながった
- 園内研究会をしたことで、環境の見直しや保育の進め方など意見を出し合う機会を多くもつことができた。園内研究会後も学年間で連携し、担当クラスだけでなく学年間で子どもたちを育てていくという意識が高まった。担任の意識の変容が子どもたちの育ちにつながったと感じる
- 年齢や一人ひとりの発達に合った環境構成や援助が大切ということを学んだ
- 環境を見直したことで、各遊びのスペースが確保でき、それぞれの遊びをじっくり楽しめる姿が見られるようになった。子どもの姿に応じて環境を整えることで、遊びが落ち着き、友だちとかかわって遊ぶきっかけにもつながった
- 保育者の言葉がけやかかわり方から、肯定的に子どもを見取ろうとする意識が高まっていると感じた
- 子どもの育ちあっている姿を意識して保育を実践する中で、優しさ・素敵などころにも改めて気づけ、その姿について保育者間で熱く語り合うことで、高め合えた
- 助言を受け入れるとともに、保育の見せ合いっこをする中で、互いの保育のよさを認め合いながら、保育者自身が主体的に学び合おうとするようになった
- 主担任と支援児担当で、インクルーシブの視点を共有し、子どもの様子やかかわり方を連携する中で、よりよい支援やかかわりにつなげることができた
- 支援児についての悩みに対して意見をもらったことで、見方・捉え方・考え方を知り、支援のステップが積み重なっていることを実感できた
- 保育の中でうまくいかないことや心がモヤモヤする時も、担任同士で声をかけ合うことで心が救われ“無理をしなくていい”“仲間がいるから大丈夫”と感じられた。心にゆとりができることで、子どもと一緒に楽しみながら子ども目線で保育を考えられるようになり、担任同士も認め合い、育ちあっていると感じた
- チームで対応し、支え合える体制づくりとききやすい雰囲気ができたことで、一人で悩まず、多様な意見から保育内容の幅が広がった
- 学年間、職員間の会話が増え、子どもの成長をみんなで喜び合えるチームになりつつある

<課題（次年度に向けて）>

- 1年次の成果を土台にし、“多様性を認め合い”自分らしく輝く毎日をめざし、研究テーマを深めていきたい
- 会議や話し合いの時間の捻出が難しいため、話し合う内容を事前に伝え、意見を出しやすくすることで有意義な時間をめざす
- 自園の保育（他学年）を見て学べる機会がもっと欲しいとの意見もあったため、保育をビデオや写真で撮影して、見て学べる工夫をしていく
- 『育ちあい』の認識が曖昧だったため、次年度は具体的な事例を出し合い、年度当初に擦り合わせをする

- 正規職員と同じようにフリー保育者の研究への参加の仕方、保育について学ぶ機会も保証できるようにし、西郡の子どもたちの育ちをともに分かち合えるようにしていく
- 『個の育ち』とともに、『クラス集団の育ち』を支える視点を意識してねらいをもって保育実践に取り組めるようにする
- 引き続き、支援児のための保育や支援ではなく、一人ひとりが違うことが前提で、それこそがインクルーシブな視点であり、インクルーシブ教育・保育であることを全職員の共通認識にする
- 『育ちあい』『認め合う』子ども、保育者の姿などを、無理なく可視化できる方法を工夫し、保護者や地域へも発信していく
- 子どもの『やってみたい遊び』を支える保育者の役割として、遊び環境のタイミングや援助のあり方など意見を出し合い、多様な考え方を受け入れることで保育の質の向上につなげていく
- 子どもの気持ちに寄り添う『養護の働き』をもって、発達年齢に合っているか、保育のねらいとのズレはないかなどの『教育的働き』を織り交ぜて、応答することを大事にしていきたい
- 西郡らしさを大事にししながら、職員の同僚性（チーム力）がパワーアップすることをめざす。引き続き、次年度も研究を通して、一人ひとりの保育者が輝き、認め合いながら、保育の専門性も高めていきたい



令和6・7年度 幼児教育研究

心も体もげんきいっぱい！自分らしさ輝くこども園
～ 心地よいそよかぜの中 育ちあい認め合おう ～
＜ 1年次 研究報告 ＞

令和7年3月 発行 （ R6-204 ）

【発行】八尾市

八尾市教育委員会

〒581-0003 八尾市本町一丁目1-1

【TEL】072-991-3881（代表）

